聖霊降臨後第１２主日（特定１７）　　謙遜さと謙虚さ　　２０２２．８．２８．

今週の福音書は、イエス様がある安息日に、食事のためにファリサイ派の議員の家に入られたところから始まります。そして、そのあとは安息日に人を癒す話は省略して、「客と招待する者への教訓」についての話になって行きます。

この教訓話は、二つに分かれています。前半は、婚宴に招待されたら、上席に着かないように。なぜならあなたより身分の高い人が招かれていた場合、その人に席を譲らなければならなくなって、あなたは恥をかいて、末席につかなければならない、というわけです。

だから招待を受けたら、末席に座りなさい。そうすれば、招待した人が、もっと上席に進んでくださいと、言って面目を施すことになる、とイエス様は言われるのです。そして、まとめの言葉として、「誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」と言われます。

でも、どうなんでしょうか？高ぶった心を持った人が、わざとへりくだる姿勢を示す、ということがあるのではないか。上席に着きたいので、わざと末席に座って、上席に呼ばれるのをじっと待っているという人々が出てくるのではないか。そんな生き方をするように、イエス様はすすめているように受け取れます。

文語の祈祷書の時代、この前半のお話は、三位一体後第１７主日の福音書として、毎年秋に読まれていました。そして、最後が『おおよそおのれを高うする者は低うせられ、おのれを低うする者は高うせらるるなり。』という言葉で締めくくられるので、私は子どもなりに、教会の人々は末席にこだわるのだろうか？みんなわざと後ろの方にすわるのは、本当は前に呼ばれたいからだろうか、などと考えてしまっていました。

ところが、新しい祈祷書になり、招かれる人への教訓だけでなく、招く人への教訓を一緒に読むようになって、前のたとえ話の意味が、解き明かされているような気がしてきました。

後半のたとえは、人を招待する場合には、招いてお返しをするような、友人や親戚やお金持ちを呼ぶな。そうではなく、貧しい人や体の不自由な人を招きなさい。そうすれば、その人たちからのお返しはないので、神様から十分な報いがあたえられる、というわけです。

人から、上席に進むように呼ばれることを期待するのは、間違っている、ということなんでしょう。

皆さんは、聖フランチェスコの半生を描いた「ブラザー・サン、シスター・ムーン」の映画を観られましたか。あの映画の中で、アッシジの教会が何度かでてきましたが、印象に残ったのは、二つの教会でした。最初の方は、アッシジの大勢の人が集まる大きな教会でのことです。

フランチェスコたち金持ちは礼拝堂の前の方に座っていますが、貧しい人々は礼拝堂の後ろにみんな立って礼拝を見ているのです。フランチェスコはそれを見て、「違う！間違っている」と言いました。

その時、ちょうど正面の十字架のイエス様の目が開いていたのです。それは、あたかも、フランチェスコに何か仕事を命じておられるように、映画では描かれていました。

そのあと、彼は野原に荒れ放題になっているサン・ダミアーノという教会を建て直しにかかります。そして、大勢がそれを助けて、工事が進みました。やがて完成した礼拝堂には、貧しい人々や、体の不自由な人々が集まって、楽しく歌を歌っている姿がありました。

上席と末席を問題にしている話と、お返しのできない人々を招く話が一緒になったような、そんな姿を頭に描きました。

上席を争うような教会は、間違っている。みんな自分が貧しい者、取るに足りない者の一人であることに気づきなさい。そして、貧しい者たちで構成された教会こそが、神様の願っておられる教会だ、とあの映画は私たちに教えているように思えました。

さて、私は今日の説教題を「謙遜さと謙虚さ」としました。イエス様は今日のお話で、この両方を教えておられるように思えます。そして、特に前半の上席に着きたがるお話では、「謙遜」ということが語られているように思えました。

「謙遜」という言葉を辞書で引くと＝自分を低い者として、相手に対して控えめな態度をとること。

このように説明されています。上席に着かず、末席に座っている、というのは、処世術として、「自分を低い者として、相手に対して控えめな態度をとること」その謙遜さを教えるためには、とても分かりやすいたとえだと思います。私たちが、「出しゃばらない態度」で生活することは大事でしょう。

でも、不遜な人は、上席に座りたいので、自ら上席に行こうとしたり、呼ばれるために末席に居ようと、謙遜なふりをするけど、どちらもダメだということをイエス様は言っているのではないでしょうか。

謙遜なふりをする人というのは、本当は傲慢な人なのかもしれません。高いところを望んで、ジッとそのチャンスを狙っている人かもしれません。もっと末席の素晴らしさに気づけと言われているように、私には思えます。

「謙虚」という言葉を辞書で引くと＝自分の存在を低いものと客観的に見、相手の考えなどの中に取るべきものが有ればすなおに受け入れる態度を失わない様子。

このように説明されています。

謙虚な人というのは、自分が何も野望を持っていなくて、末席にいることを喜んでいる人ではないでしょうか。それは、多くの集まりで、末席にしか着けない、貧しい人々を上から目線で見下げるのではなく、その人たちの素晴らしさを、素直に評価して、お互いをほめて、一緒にいることを喜べる人ということではないか、と私は思うのです。それは自分自身も貧しい者のひとりだと知っているからです。

イエス様は別の個所で、『あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。』（マタイ２０：２６～２７）とも言われています。

偉くなりたいために、皆に仕える者になりなさい、というのではありません。
いちばん上になりたいために、皆の僕になりなさい、というのでもありません。

偉くなりたいとか、いちばん上になりたい、という思いを捨てて、仕える者、僕になれと、イエス様は教えておられるのです。なぜなら、そこがいちばん居心地がいいからです。

「謙虚」という言葉は、もう一度言いますが、自分の存在を低いものと客観的に見、相手の考えなどの中に取るべきものが有ればすなおに受け入れる態度を失わない様子。

他人と自分を比べて、自分を高く評価するのではなく、ほかの人の中にある素晴らしさを、素直に評価し、ほかの人をほめることができる人。そのような生き方をしなさい、というのが、今日の「客と招待する者の教訓」の話で私たちが学ぶべきテーマなのだと私は思います。